みいけ

発行所
三池炭鉱労仂組合
大牟田市不知火町2
電話⑧3033番
③3034番
編集兼発行人　山下　開
半年間600円　送料共

遺族・CO裁判、災害責任追求、特集号

第6号

三井鉱山の体育館が、遺体安置所に一変。ここに中村さんが、ご主人の遺体を納めた柩にすがって着いたのは、十日の午前十時頃だったという。働く者の悲しみと怒りで、体育館が揺らいでいた。

怒りの手記　あの日の思い出

爆発と共に吹き飛んだ生活設計
ただ菊の花ばかりは今も咲く…

遺族　中村恒子

一九六三年十一月九日午後三時十五分、三川鉱で炭じん大爆発発生。

心配の余り、主人と同じ仕繰工として、同じ坑底の職場で働いていられた溝口泉さん（弟と共にこの大爆発の犠牲にされた人）の奥さん（富美代さん）と一緒に家を飛び出し、三川鉱に急ぎました。

三川鉱はもう裏門も正門も人だかりで、事故が大変なものらしいことがわかったほか、何もわかりそうにありませんでした。

そのまま三川支部にかけ込み、昇坑者を告げる速報板に目を釘づけにしたまま一喜一憂しながら、救援の一刻も早い事を祈りつづけたものでした。

ガスが充満していると聞く坑内で、主人はいったいどうしているのだろう。心はちぢに乱れます。

それは、爆発後十三時間も経った十日の午前四時頃のこと、主人の名前が、通気関係の皆さん方のと一緒に呼ばれました。「今から病院に運ばれる」、というのでした。

私は病後の弱い体。近所の森川さんの奥さんにささえられながら暗い夜道を三井天領病院まで走りに走りました。

病院に着き、担ぎこまれている負傷者の間を狂ったようにさがし回りました。夜は白じらと明けましたのに、主人の姿は見当りませんでした。そのはずで、主人の体は耳鼻科の遺体收容所の方へ運びこまれていたのでした。

そのことを知って、あわててそちらへかけつけましたが、私にはもちろん、子どもにも兄弟たちにも、もう主人は口をきいてはくれませんでした。すでに冷くなってしまって、主人はその口から血を流して息絶えていました。

冷くなった遺体が、次から次へと運びこまれて来、また運び出されてゆきました。

うっかりすれば主人の遺体を見失ってしまいそうに思われ、無我夢中になって、主人の遺体が納められていた柩にしがみついていた記憶が、ちょうど昨日の事のようによみ返ってまいります。

あの日、会社の手で坑内保安さえ維持されていたならば、主人はいや四百五十八人はその命を奪われずにすんでいたのに。なぜ、保安を確保してもらえなかったのか。

資本にとっては、あるいは虫ケラ同然の労働者に過ぎなかったかも知れないが、私たち家族にとっては、かけがえのない夫であり、父であったのに……。

思えば、口惜しさと怒りの消えることのない歳月でした。病気でもした主人を、精いっぱい看護してあの世へ見送ったのでしたら、あるいはあきらめもつくかも知れませんが、その朝元気いっぱいの笑顔で出勤してゆきました姿が最後の別れになってしまった私にはどうしてもあきらめの尽きるはずがないのです。

ましてのこと、病弱のゆえに、主人の力を借りながらやっと主婦の座を保ってくることのできました私には。

遺族対策として設置されました荒尾アソニット（毛編み製品）と三池縫製（シャツ類ほか）の両工場に入社されている未亡人の皆さんと一緒に仕事ができたらどんなだろう。一カ月でもよい、体がもつ間だけでも……と、病院の先生とも相談し続けましたが、病弱の私にできることは、突然父親をうしなった子どもたちのために生きながらえることしかないではないか、との結論を出す以外にありませんでした。それに三池労組、三池主婦会の皆さん、隣り近所の人びとの暖い同志愛に包まれ、勇気づけられている事を思えば、自然子どもを育てあげるまではがんばらねば……との決意も湧き出てくるのでした。

以来私は待機手当（就職できない遺族に対して、三井鉱山が与えているわずかな補償）受給者の一人ですが、しかし予想だにしなかった悲しみのために泣き暮らすことになった私たち母子三人の上に今や生活問題がずしりと重くのしかかってまいりました。

家の中がしーんと静まり返った夜更け、寝息を立てているあどけない子どもたちの寝顔を見ては、またまた「病弱の自分は、この先どうして暮らしてゆくか」と思案し初め、そーっとひとり仏前に座り続けたこともあります。

子どもにしてもよほど淋しかったものと見え、勉強の合い間にでも書いたのでしょうか、紙片に書いていました。

「お父さんはもういない
炭じん爆発で尊い命を奪われた
お父さん
呼んでも呼んでも帰らないお父さん
優しかったお父さん
僕は海に向かって叫ぶ、お父さん
空に向かって呼びかける、お父さん」

「お父さん」という文字ばかりでした。

考えて見ますと、遺族としての苦しみは、私ばかりではないのです。それは、亡夫たちの初盆を迎えた頃の事でしたが、三井鉱山に対する余りにも冷い仕打ちに抗議して、鉱業所で五十八日間座りこみを行なったときの事でした。

座りこみには、三池労組の組合員の方がたも参加して下さいましたが、その中に一人の幼い女のお子さんがいました。

「父ちゃんは、はるみちゃん」

「バイバイというて、会社にゆかっしゃったきり、まだ帰って来ないもん」

そういって、そのお子さんは支援の座りこみにはいって下さっている組合員の人びとの中を、お父さんの姿を探し求めながら歩き回るのでした。そのとき、はるみちゃんは三つだったのです。

また、お母さんに十円のお小遣いをおねだりしたのに、お母さんから五円しかもらえず、「あとの五円はお父さんからもらうとだもん」と、通勤電車のホームにもう帰って来ることのない父を待ちながら立ち続けていた、五つの坊やもいます。

あるいは、大学に進学するんだと張り切って勉強していた長男が突然の父親の死に進学をあきらめて、泣く泣く就職にふみ切っていったのはよかったのですが、そこでの就職試験の際「お父さんはいないのですね」と試験官から念をおされ、口惜し涙を流したり。

一方の会社の態度はどうでしょう。

昭和四十一年二月四日、全日空の飛行機が墜落するという大惨事が起きたときの事です。全日空社長は、並んでいた柩の一つひとつに深く頭を下げ、合掌しておわびするばかりでなく、遺族に対して心からわびていられた姿をテレビで見たときは、思わずじーんとくるものがあったのです。

それに比べて、選挙演説にやって来たついでに三川鉱の坑口に立ち寄った池田元首相を案内してきた三井鉱山の当時の槊木社長は、遺影を胸に抱きながら面会を求める遺族の私たちをすっぽかし、詫びるどころか、顔さえ見せませんでした。

それに弔慰金にしましても「運送約款で定められた最高額の三百万円を基準に、できる限り出したい」、という全日空社長。「炭鉱として、四十万円が常識」といい切った槊木・元三井鉱山社長。こんな資本の手で主人は殺されたのか、と思いますと、新たな怒りがこみあげてまいります。

とにかく、「無理せずに、一日でも長生きできるようにしろよ」といつも優しくいたわってくれた主人との、将来の生活の設計図も大爆発と共に吹き飛んでしまいました。

おかげで、子どもたちも学校卒業後就職できてよそで働いておりますから、今は私一人の生活です。

あれから十年。心ないことに、主人が大好きだった庭の菊もやがて花を咲かせることでしょう。そんな菊を見るにつけ、うれしそうに目を細めて花畑をいじり回していました、なつかしい主人のおもかげがよみがえってきては、今も思わず涙を流す私なのです。

※

以上は中村さんの文集の中からごく一部の抜すいです。全文が紹介できないことが、残念でなりません。

中村さんは義母の看病のためすっかり体をこわし、胸部疾患のため昭和二十九年の夏以来入院の身となり、三十二年の春にはついに銀水園療養所で左肺切除の大手術を受けたのでした。

その直後、それをわずらえばも早や命はないといわれている、あの"膿胸"を併発。こんどは肋骨五本を切除する、まさに命がけの大手術。不思議に、命をとりとめることができたのでした。

その後は入院―退院―入院をくり返し、いよいよ退院して家に落ちつけることになったのは、もう三十四年になってからでした。

三池闘争中も、やっとできる子守りで、炭じん大爆発のときも決して満足な体ではなかったのでした。よく今日まで、命を保ってこられたものです。

今は亡きご主人の名は伝造さん。行年四十三才でした。結婚は昭和二十三年三月二十八日。長男・恵一君、次男・功君はすでに家を出て就職。、お住居は「大牟田市新港町六番地、新港町社宅六十九棟」。当年とって四十八才でひとり住まいです。